

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	秀 真一郎
2. 審査委員	主 査：連大教授（岡山大学）          西山 修 副主査：連大教授（鳴門教育大学）      田村 隆宏 委 員：連大教授（鳴門教育大学）      久我 直人 委 員：連大教授（岡山大学）          吉利 宗久 委 員：連大教授（岡山大学）          片山 美香
3. 論文題目  保育者による受容を促す統合的な効力感向上プログラムの実践開発	
4. 審査結果の要旨  先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 秀真一郎 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。  論文審査日時：令和5年2月23日（木・祝）9時40分～10時10分 場所：Zoomによるオンライン実施  <b>1. 学位論文の構成と概要</b> 第1章 研究の範囲と位置付け 第1節 研究の背景と問題の所在 第2節 用語の統一と倫理的配慮 第3節 研究目的と内容構成 第2章 保育現場における保育者による受容の捉え方の実際 第1節 保育者による受容と保育実践への意識 第2節 保育者による受容の捉え方の量的分析 第3節 保育者による受容の捉え方の質的分析 第3章 保育者による受容の力量形成と自律的な保育への変容 第1節 保育者による受容に関わる効力感の尺度構成 第2節 保育者による受容に関わる効力感向上プログラムの開発 第3節 保育者による受容に関わる効力感向上プログラムの効果 第4章 研究の総括と展望 第1節 保育者による受容の概念定義とその意義 第2節 支援プログラムの開発と保育者の変容 第3節 今後の課題と展望 引用文献 資料	

保育者は日々の保育の中で、子どものより豊かな発達を促そうと、目の前の子どもや保護者と向き合い、受け止めながら保育を行う。保育者が子どもや保護者を捉え受け止めるという行為、すなわち保育者による受容は、保育理念として極めて重視されてきたが、必ずしも十分な知見が蓄積され共有がなされてきたとは言い難い。そこで本研究では、保育現場における保育者による受容の捉え方の実際を、量的及び質的に分析することにより、実証的な知見を得るとともに、保育者による受容に関わる効力感（以下、保育者受容効力感）を測定する尺度の開発を行った。そして、この尺度を活用し、保育者が自らの受容について理解し、自律的に保育の変容を図ることを支援する、統合的な効力感向上プログラム（以下、支援プログラム）の開発、実施、及びその効果と関連要因の検証を行った。その際、保育者受容効力感及びその関連変数に着目し、保育者に対する効果的な支援方法の提示を目指した。

本研究全体は、4章構成である。第1章では先ず、主題である「保育者による受容」について、研究の範囲と位置付けを明確化した。次に、国内外の「受容」「保育の質」「保育者効力感」に関わる先行研究を概観した上で、研究の目的と内容構成を示し、定義付けを行い、用語を整理した。また、本研究全体に関わる倫理的配慮について記した。さらに、本研究の全体像、対象と分析方法を示した。そして、保育者自身が自律的な変容を図ることができる支援プログラムを開発するという、本研究の全体構成を説明した。

第2章は、保育者による受容の力量形成ならびに自律的な保育への変容に向けた基礎的な知見と、実証的な研究により各節が構成される。第1節では、保育者による受容の捉え方の特徴を分析する背景について先行研究を整理し、保育者による受容を共有する必要性について論じた。さらに、保育者による受容の力量形成と自律的な保育への変容に向け、保育者受容効力感の可能性について論じた。第2節では、保育現場における保育者による受容の捉え方に関するテキストデータを収集し、主にテキストマイニングにより量的に分析することで、保育者による受容の抽出語と共起関係、受容の捉え方と保育経験年数の関係や共通点等について明示した。第3節では、保育者による受容の捉え方について、SCAT (Steps for Coding and Theorization) により質的分析を行った。具体的内容を理論的内容へ進めることで、保育者による受容の捉え方が実証され、総合的な知見が示された。これらにより、保育者による受容に焦点化した保育の変容を促す、支援の端緒が得られた。

第3章は、保育者による受容の捉え方を活かし、保育者受容効力感を高める支援プログラムの開発とその効果の検証を試みた。第1節では、保育者受容効力感を捉える新たな尺度（以下、保育者受容効力感尺度）を開発し、その構造を明示した。分析の結果、4因子20項目が抽出され、明確な多次元構造が確認された。また、十分な信頼性、妥当性を有することも確認された。第3節では、現職保育者に対して、第2節で開発した自律的な保育への変容を促すことを目指した支援プログラムを実施し、検討を加えた。具体的には、支援プログラムを実施した実験群と統制群に対して、保育者受容効力感等を短期縦断的に測定し、支援プログラムの効果を検証した。その結果、実験群の保育者受容効力感が、有意に上昇したことが明らかとなった。また、支援プログラムの確かな持続効果が確認された。他の関連変数の中にも同様の効果が認められ、その有効性が裏付けられた。

第4章は、第1章から第3章までの研究成果を整理し考察を加えるとともに、研究の到達点、今後の課題、及び今後の展望を提示した。第1節では、保育者による受容の特徴と変容過程に関して、得られた知見を整理し考察を加えた。具体的には、保育者による受容の高まりに関する考察を加え、モデル図を提示した。第2節では、保育者による受容と保育者効力感との関係を捉えた上で、支援プログラムを開発、実施した結果について改めて検証し、考察した。支援プログラムでの保育者受容効力感の高まりと保育者の意識変容から、支援プログラムの流れと保育者の意識変容についてモデル図を提示した。第3節では、今後の課題と展望として、保育者受容効力感尺度と支援プログラム開発・実施上の課題を示した。そして、保育者による受容からみる展望と可能性について論じた。

## 2. 審査経過

本論文の主要部分は、3編の査読付き学術論文として、全国学会誌等である『教育実践学論集』（第一著者、兵庫教育大学大学院 2020）、『応用教育心理学研究』（第一著者、日本応用教育心理学会誌 2021）、及び同誌（第一著者、日本応用教育心理学会誌 2022）から成る。これらの研究成果と内容につき審査を踏まえ、5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下のとおりである。

### （1）研究目的と論文構成の整合性について

本論文は、保育者による受容に焦点を当て、保育者の力量形成と自律的な保育への変容を促す支援プログラムを開発し、具体的な支援の手立ての提供を研究目的としている。論文構成は、本目的に沿って先行研究を整理した上で、保育者による受容の捉え方の分析及び、保育者受容効力感尺度の開発を踏まえ、支援プログラムの開発、実施、分析、考察の上で、保育者の力量形成への支援を論考する流れである。したがって、研究目的に整合する妥当な論文構成であると認められる。

### （2）先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

先行研究の概観では、幼児教育・保育領域に関わる学術的研究等から、「受容」「保育の質」「保育者効力感」の概念を抽出し、丁寧に整理、考察している。また、実践データ分析においても近接領域や国内外の文献を十分に網羅している。支援プログラム作成等に使用した資料にも、引用に十分留意して取り扱っている。倫理的配慮も問題ない。よって、研究資料の質・量、扱い方ともに学位論文の水準にあると判断できる。

### （3）分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

分析と考察においては総じて、主観的恣意的な記述を排除し、科学的な解釈や論理的な文章表現への配慮が認められる。分析では適宜、分散分析等による検定、記述データの量的分析、及び質的分析を行い、客観的な分析に努め、研究の再現性、妥当性、信頼性を高めている。また考察では、先行研究や関連領域の知見を十分踏まえながら、深い論考が行われている。論の運び方は明快であり、得られた結果から、納得がいく合理的な結論を導くことができている。

### （4）教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

保育者支援の実践開発は喫緊の課題であるが、実証的研究及びそれに基づく実践開発は十分とは言い難い。本論文は、保育者による受容の捉え方を踏まえ、保育者受容効力感を高めることで自律的な保育の変容が可能となる支援プログラムを開発した。プログラム参加者の保育者による受容や保育実践の変容モデルも示し、実践継続による力量形成に資すると言える。よって教育実践学の観点からも独創性に長けており、今後の発展が期待できる。

### （5）学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

幼児教育・保育の質の確保・向上のために、保育者の力量形成は喫緊の課題となっている。本論文は、これに資する独自の支援プログラムを提供した。保育者による受容の捉え方、保育者受容効力感等の関連変数の実証的検討を踏まえ、保育者による受容の変容過程、及び支援プログラム参加者の保育への意識や実践変容が示されたことで、今後、保育者の熟達化へ向けた力量形成が期待できる。以上により本論文は、学校教育実践へ貢献する成果が認められ、学校教育学の発展に寄与する論文と言える。

## 3. 審査結果

以上により本審査委員会は、秀真一郎の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。